



NewsLetter

自治医科大学 地域医療オープン・ラボ

2021
JUL
特別号

英国における「医療・医学」の女性化をめぐる議論と対策

自治医科大学総合教育部門倫理学研究室の渡部麻衣子講師は、英国において、女性医師の増加が医学の弱体化につながるとする議論がいかにも批判され、弱体化を防ぐ対策へと繋がられたかを報告しました。この論文は『科学技術社会論研究』の第19号「科学技術人材のダイバーシティ研究」に掲載されました。

論文：渡部麻衣子（2021）「英国における「医療・医学」の女性化をめぐる議論と対策」『科学技術社会論研究』19 [<http://www.tamagawa-up.jp/search/s1247.html>]

Q1. 「医療・医学」の女性化とは何ですか？

「女性化」は、ある分野に携わる女性の数が増加していることを指す言葉です。医療・医学だけでなく、教師や弁護士に占める女性の割合が増加する時にも用いられました。

英国では1960年代から医学生に占める女性の割合が増加の一途をたどっており、1990年代には男性の割合を追い抜きました。医師に占める女性の割合は、2020年時点ではまだ若干男性よりも少ないですが、まもなく追いつくとされています。この状況が「医療・医学の女性化」として呼ばれています。

Q2. 「医療・医学」の女性化はイギリスだけで生じているのですか？

そんなことはありません。OECD加盟34カ国中25カ国で、医師に占める女性の割合は4割を超えています。5割を超えている国も11カ国あります。

Q3. 論文執筆に至った経緯を教えてください。

二人も女性の首相を輩出し、在位最長の女王もいる国なので意外だったのですが、イギリスでは当初「医師の女性化」が「医学界の危機」として受け止められました。現状として女性医師は、男性よりも勤務時間が短く、管理職につく割合も著しく低く、結果として給与も低い。そうした女性医師が過半数になるということは、社会における医学界の地位を下げるという主張されました。さらに意外だったのは、この主張を2004年にした王立内科医協会の会長が女性だったということです。けれどもこの主張は即座に批判され、2009年には、必要なのは労働環境の見直しだということが報告書にまとめられました。また同じ報告書の中で長時間労働を評価している現行の評価基準を見直すことも提案されました。また、2011年には、国立医学研究機構は、助成金に応募する機関の全てに、機関内のジェンダーバランスを均衡化する施策を行っていることを、外部機関の評価を受けて客観的に示すことを求めています。こうした一連の出来事は、ある職能集団における女性の増加の社会における受け止められ方の変容と、女性が増加することによる職能集団の文化の変容とが生じる一つの場面をダイナミックに表していて、「ジェンダーと医科学の関係性の歴史」に関する一つの重要な事例だと思ったので、論文にまとめたいと思いました。

Q4. 今後の研究は？

「女性化」という概念をもう少し掘り下げてみたいと思っています。昨年発表し、ここでも報告して頂いた「HPVワクチン」の対象が女性に限定されている現状も、「ワクチンの女性化」と呼べる現象です。また、こちらは7月に発表を依頼されているので鋭意準備中なのですが、女性に特有の身体的必要のために開発される技術をフェムテックと呼んで、政府が支援しようとする動きがあります。これは「技術の女性化」と言えます。何かを「女性化」することには、どのような含意があって、それは女性の社会的位置付けとどのような関係性にあるのだろう、ということをいくつかの事例で分析すると、興味深いことが見えてくるのではないかと思います。

【連絡先】 倫理学研究室 渡部麻衣子

e-mail : wtnbmk@jichi.ac.jp HP : <https://www.jichi.ac.jp/bioethics/>

【発行】

自治医科大学大学院医学研究科広報委員会

自治医科大学地域医療オープン・ラボ